

KU-MA とわたし

会員 遠地 卓二

「宇宙の学校」との出会い

現役時代は人工衛星の地上追跡管制システムの開発・運用業務に携わっており、その恩返しとして退職後宇宙分野で何かお役に立てることがあればと考えておりました。退職して程なく相模原宇宙研の KU-MA 事務局で宇宙の学校関連の教材作りのお手伝いをさせていただくようになり、そこで紹介されたことが縁でNPO法人「ちばサイエンスの会」の「宇宙の学校（ちば校）」活動に参加させていただくことになりました。

熱意あふれる講師・スタッフとの出会い

「宇宙の学校」に参加してまず感じたのは講師・スタッフの方たちのいきいきとした表情です。本当に楽しそうでした。子供たちに科学の楽しさを知ってほしい、そのためのきっかけを作ってあげたい、という熱意にあふれていました。なるほどこういう方たちが地域の科学教育活動を支えているんだ、そしてそのあふれんばかりの熱意が「宇宙の学校」というすばらしい活動モデルに注がれて「宇宙の学校」活動が大きく広がっていったんだ、ということを感じました。

熱意のエネルギー源は子供たち

その熱意のエネルギー源になっているのが参加してくれる子供たちです。みんな夢中になって眼を輝かせています。それまで間近で大勢の子供たちと接する機会もなかったので、素直に感動してしまいました。特に恒例の水ロケットの時の親子の歓声を聞くと、その度にやってよかったと、、、私の退職後活動の柱の一つとして今に至っています。



▲百均アイテムで望遠鏡を作ろう

「宇宙の学校」ちば校の活動再開を目指して・・・

勿論課題もいろいろ。まずは活動メンバーの高齢化です。なかなか新陳代謝が進みません。昨今の定年延長の動きも新メンバー探しをより難しくしているようで、もっと現役世代を活動に巻き込んでいく工夫が必要です。また、コロナ禍で活動継続にも困難が生じています。ちば校もまだ「宇宙の学校」としての活動ができておりません。コロナ禍の中での単発的な活動についても「宇宙の学校」という名称を使える仕組みを考えていただくとうれしいです。

最後に、微力ながらこれからも「宇宙の学校」活動に貢献していきたいと思っています。

新型コロナと子どもたち II

-コロナ禍での教育現場の今を-

学齢期の子どもたちへの影響

「人の顔＝上半分？」 理事 吉川さやか



プロフィール
2017 年 NPO 法人太陽の村 理事長就任
・フリースクール：不登校児童・生徒の受け入れ
相模原市教育委員会フリースクール連携協議会登録
・放課後等サービス：発達障がいをもつ児童・生徒の支援
・自然体験教室：小・中学生を対象にした感性に訴える野外活動
開所以来、のべ利用人数 3 万人以上。
同年 相模原「宇宙の学校」実行委員
2021 年 1 月より KU-MA 理事就任
趣味：旅行

私は、発達障がい児と不登校児を受け入れる施設で働いています。ここ2、3年で「外に出たらコロナがいる」という恐怖から、電車に乗れなくなったり、家族以外と会いたがらなくなったりした子どもがいました。人口が少ない地方に引越すという事例もありました。令和になったばかりの時期、大阪の心斎橋の薬局で中国語で「加湯（がんばれ）」とポップに書いてマスクを販売していて、段ボールで買求めている彼等を見て、「大変そうだなあ」とひと事に思っていました。それからあつという間に日本でもコロナ、コロナと言いだし、今度は自分たちがマスクを入手するのが困難になり、子ども達に大きな影響を与える臨時休校が始まったのです。

学校や地域のイベントもことごとく中止になりました。子どもの頃の思い出は、その時にしか作れません。運動会、夏祭り、花火大会、おばあちゃんち、修学旅行。大人になって振り返って、甘酸っぱい記憶を辿ったり、友人とその話題で盛り上がったたりするでしょう。その年齢・学年でしか出来ない、貴重な経験値を積む機会が奪われてしまいました。

顔の上しか見えないマスクの着用

コロナとセットで語られるべきが「マスク着用」です。律儀な国民性で、マスクを着用して熱中症で運ばれたというニュースを聞きます。学校でのオンライン授業で相手に「マスクをしてよ」と発言する児童を見ても、もう少し周りの大人が科学的に教える必要性を感じました。

「外で会う人（お友達）」顔の上しか見えない」影響も懸念事項です。年齢が小さいほど、相手の顔全体を見ながらの表情の観察が必要になります。学齢期にあっても、表情から相手の感情を読み取るのが苦手な子どもがいます。ここにマスクが加わると、お手上げです。

コロナで救われた子どもも

ただ、コロナで救われた子どももいました。不登校や行き渋りの状態にある子ども達は、学校の授業がある時間帯に在宅している罪悪感を臨時休校中は感じなくて済みました。学校に欠席の連絡をしなくて済んだのが精神的にラクだったという保護者の声も聞きました。また、「分散登校」の期間は、子どもたちは少人数のクラスで過ごす事が出来ました。先生の目も届きやすいです。この期間は登校しやすかったのか、普段は学校を休みがちな子どもでも、出席が増えたと保護者から伺いました。

あと5年、10年したら、コロナの時期をどう振り返るでしょう。コロナより前の日常が子ども達に一日でも早く戻って来る事を願ってやみません。



▲講演される遠地さん